

S U I N O M A H O U

# スイの魔法

1 魔眼の覚醒  
MAGAN NO KAKUSEI

白神怜司  
Shirakami Reiji

Main Characters  
主な登場人物

???  
しんく  
真紅の髪の少女。  
魔法学園でスイを見つけ、  
よからぬことを企む……。

ファラ(龍型)  
たいご  
体高七メートルの  
伝説の金龍。  
一国を滅ぼすほどの  
力を持つ。

ウェイン・  
クレイサス  
紫の髪、紫の瞳の少年。  
『騎士科』に所属している  
ことを鼻にかけている。

ソフィア・  
シヴェロ  
あお  
蒼い髪、紫色の瞳の美少女。  
はし  
伯爵家令嬢。『スイ君の穏やか  
な日常を守る会』会長。

シルヴィ・  
フェルトリート  
おし  
侯爵家令嬢。  
小柄で可愛らしく  
気品もあるが、  
けっこう猫かぶり。

ファラ(人型)  
金龍が人化した姿。  
見た目二十歳前後の  
おん  
金髪赤眼の美女。

スイ  
ばんぼう  
主人公。銀髪蒼眼の孤児。  
こじ  
十歳。容姿・知性・魔力を  
備えた天才だが、  
超マイペース。

## プロローグ

石造りの冷たく無機質な円柱型の建物『王立図書館』。

館内は中央が吹き抜けとなっており、そこを円盤状の石台に魔法陣が刻まれた【魔導式エレベーター】が行き交う。各階には、湾曲した壁面に沿う形で本棚が設置されていた。そこにありとあらゆる書物が並んでいる。

壁は本で埋めつくされ、窓のひとつもない。天井部に取り付けられた【魔導式ランプ】の光がなければ、この場所は暗闇に包まれてしまうだろう。

そんな王立図書館の十四階――

吹き抜けの柵を囲むように並べられた簡素な席の一つに、小さな人影があった。

卓上ランプの下、細い指が活字を追う。白くきめ細かな肌は、その指の持ち主がまだまだ若いことを物語っていた。

オレンジの照明に染まった白銀の髪が、さらさらと揺れる。その髪の間隙から、吸い込まれそ

なほどの深い蒼を湛えた瞳が覗いた。

造り物であるかのようにも思える整った顔立ち。どのパーツをとってみても非の打ちどころがない完璧な造りだ。

「……まあそんな難しい本読んでたのか、スイ」

活字を追っていた指の動きがピタリと止まった。

スイと呼ばれた銀髪の少年に人影が重なる。呆れ混じりの声はその影の主から発せられたらしい。「うん。この本は勉強になるから」

「まっ、そりやそうだろうよ……」

再び細い指は活字を追い始める。

スイに声をかけたのは、たれ目のネイビス・ウォルス。

目尻に皺が刻まれ、優しそうな印象の男性だ。年の頃は三十代後半。茶色い髪は短く切られ、無造作に七三に分けられている。

彼はこの『王立図書館』に司書として勤務するヴェルディアの軍人である。

この世界において、『東の大国』と呼ばれるヴェルディア王国。数ある大国の中でも豊かな自然に恵まれたこの国は、一年を通じて寒暖差の少ない穏やかな気候を活かし、『豊穰の国』として栄えていた。

そのヴェルディアの中核ともいべき都市が、王都『ヴェル』だ。スイやネイビスのいる王立図書館はこの街の象徴的な建物のひとつであった。

十七階層まで続く図書館は、それぞれの階層に呼び名がある。

一階から四階までは『一般階層』。王都の一般人が足を運ぶとしたら大抵この一般階層だけで事足りる。

五階から八階は『専門階層』。ここにはあらゆる分野の専門知識が詰め込まれた蔵書が置かれている。

九階から十三階は『研究階層』。専門階層よりさらに高度な学術書が並ぶ階層だ。そのため、近隣の領地からもとときおり人が訪れることがある。常人の域を超えた知を欲する研究者にとっては知識の泉ともいえる場所である。

十四階と十五階は『論文階層』。学者などが書いた論文が数多く置かれているが、不十分な研究の書物も多いことから、『未開階層』とも呼ばれていた。ちなみに、スイとネイビスがいるのはこの階層である。

そして、その上の階が『禁書階層』。

持ち出し禁止。閲覧するには王国の許可が必要という一般人には縁のない場所である。

(それにしても、たかだか十歳の子供がこんな階層の本を読むなんて、なあ)

ネイビスはいつもの光景に、改めて感じ入る。

本来、普通の子供が立ち寄ることなどまず有り得ない『論文階層』。そこに、自身の娘よりも幼い子供がいるのだから、ネイビスもため息を吐きたくもなるというものである。

(そーいや、初めて会った頃も驚かされたよなあ……)

「なあ、ネイビスさん。あそこの図書館には銀色の髪をした子供の幽霊が出るって話だぜ」

王城の横に併設された軍務局。

司書業務を命じられたばかりのネイビスに、昔から親しかった後輩が面白そうに声をかけた。縦社会と思われがちな軍部だが、ネイビスの生来の気さくさから、年下の後輩もフランクな口調だ。

「くだらねえ噂だな？ そんなもん、今どき子供でも信じやしないだろうさ」

「いやいや、ホントなんだって。前の司書だったジイさんが言ってたんだよ」

「へえ……。あの頑固ジイさんが、ねえ」

司書として長年勤めていた老人。彼が寡黙で冗談を嫌う男であることは、ネイビスも知っていた。だからこそ、ネイビスにはその話がまつたくのデタラメだとは思えなくなった。

「そうなんだよ、あのジイさんがそんなこと言うんだぜ？ ただの冗談じゃねえだろうさ」

「図書館に住む幽霊、か。そいつは是非ともお目にかかってみたいもんだな」

二十代の頃のように、第一線を走るには少々無理の出始めた三十代後半の年齢——ネイビスに言

い渡された勤務地は、地方の貴族領ではなく、幸いにも王都であった。彼の娘はこの頃——つまり三年前には、すでに王都にある『ヴェルデア魔法学園』に在籍していた。地方勤務となれば単身赴任もやむなしという状況だっただけに、その決定は素直に嬉しかった。

そして王立図書館への勤務初日、彼は【魔導式エレベーター】に乗って司書の事務所がある十六階層へと向かった。

その途中で初めて噂の幽霊——スイの姿を見かけたのだ。

(……いや、当時は本当に出やがった、なんて思ったもんだ……。なんせ七階層で子供が一人で本を読んでいたんだから……。それに、この容姿だ)

ネイビスは、未だ本に指を走らせているスイを見つめながら、当時のことをそう振り返った。

『専門階層』に入り浸る、当時七歳の少年。

この広い世界において生まれるはずのない、銀髪の持ち主。

年齢と容姿、どちらをとっても現美味を帯びず、幽霊だと騒がれるのも頷けるとネイビスは思ったものだ。いや、むしろ幽霊であった方が納得できるというのが率直な感想であった。その方がまだリアルだったのだ。

「なあ、スイ。そこに書いてある内容とか、全部理解できるんだよな？」

「うん。これまで読んだことのない知識は出て来ないからね。今読んでいるのは『条件魔法』の発

動とその原理の推察について』っていう本だけど、これは【条件魔法】を発動したときに、その『媒介』となった要素がどのレベルにおいて周囲に影響を——」

「——あー、うん。わかった。変なこと訊いて悪かった」

改めて、ネイビスは思い知らされた。目の前にいるスイは、今まで読んだ本の内容をすべて理解し、その上でこの階——つまりは『論文階層』にある書物を読んでいるのだ、と。

「まったく、凡人と天才の違いってヤツかね……。そういや、ヴェルディア魔法学園で異例の飛び級をしている生徒がいるって軍部で噂になつてたな。なんでも十歳で座学をすべて修了したっていう天才児らしいが……」

不意に活字を追っていたスイの指が、ピタリと止まった。

「十歳って言えば、確かお前さんと同い年だろ？ 今どきの十歳つてのはすごいねー」

笑いながら何の気なしに話をふったネイビスだったが、目の前で気まずそうに頬を掻くスイの顔を見て、その笑いは徐々に乾いたものへと変わっていく。

「はは、は……。つて。まさか、それって……」

「うん……。たぶん、僕のこと、だと思っよう……」

「……。なあにいい!? だ、だけどお前、この時間、生徒だったら学園にいなきゃおかしいだろ！」  
「僕、試験の成績が優秀だったらしくて、特別授業つてことで、先生と一対一で午後から授業受けてるんだ。だから、普通の授業には出たことがないんだ……」

今は午前十一時。学園に通う生徒ならば、クラスで授業を受けている時間である。そして、いつも午後になるといなくなるスイ。どこに行っているのかと考えたこともあるが、あまり細かく訊いたことはなかった。

考えれば考えるほどに、断片的な噂や情報のすべてが繋がっていく。

「……なるほどな。はあ。いつもお前には驚かされてばかりだよ、この野郎」

「い、痛いよ」

ネイビスにガシガシと乱暴に頭を撫でられたスイが、その手を掴んで振り払う。

「お前の親もさぞかし喜んでるだろ？」

「ははは、僕に親はいないんだよ、ね。僕、教会にいる孤児の一人だから」

「え……。そうか。ワライ、な」

「ううん、気にしないで。今まで普段の生活についてなんて話したことなかったんだし。それに、僕は辛くもないから」

バツの悪そうな表情を浮かべたネイビスに、スイがあつさりと言った。

スイとネイビスはそれなりに親しい。それは、いつもこの閉鎖された空間で会い、何度か言葉を交わすことで培われた関係だ。しかし、お互いの私生活にまでは及んでいない。

ネイビスに娘がいるとは聞いたことがあつても、その年齢まではスイが知らないように、スイが教会に拾われた孤児であることをネイビスは知らなかった。

「そっか。しつかし、たった三年で十年分を修学したってことだもんなあ。〈使い魔〉や〈魔力ランク〉なんかはどうなんだ？」

「わからないんだ」

「わからない？」

「うん、わからない。もともと〈魔力ランク〉も〈使い魔〉も、四年生から授業に取り入れられる内容でしょ？ 僕が受けてたのは全部座学ざがくの授業ばかりだったから、そういった実技に当てはまる授業は飛ばしてるんだ」

ヴェルディア魔法学園には七歳から十年間、つまりは十七歳まで通うのが一般的だ。

生徒の生活レベルに関係なく、貴族であっても孤児こじであっても入学でき、授業料も免除される。

これはひと昔前と異なり、現在では魔法が生活に不可欠であるためだ。実際この世界では、才能の有無や力の差はあるにせよ、すべての人が魔法を使える。

それに対し、誤った知識の蔓延まんえんや、身勝手な価値観を排はするために、魔法学園は重要な教育機関と位置付けられていた。

そんな魔法社会において、もっとも重要なのが〈魔力ランク〉と〈使い魔〉の存在である。

〈魔力ランク〉を割り出し、〈使い魔〉を実際に使役しえきし始めるのは、その子供が十歳になったとき——ヴェルディア魔法学園で四年生になったときというのが通常だった。

まれに一年生でも〈魔力ランク〉を測定することがあるが、この時期の魔力はまだ不安定で変動

することもあるため、あくまでも参考値としてしか扱われない。

その点、十歳ともなれば身体も成長し、魔力も安定の兆きざしを見せる。

そこで正式に〈魔力ランク〉を測定し、それを今後の目安きざしとするのだ。

〈使い魔〉についても、四年生になってから、『獣育学じゆういく』と呼ばれる授業で初めて召喚を行い、契約を結ぶ。

さすがの飛び級生徒スィも、こうした実技は基準年齢に達するまで受けなかったのである。

「それじゃあ、どうするんだ？ 〈魔力ランク〉も〈使い魔〉も、これからの生き方を決める大きな要素ようそだろ？」

「うん。だから僕も、今度の春から四年生の一般クラスに編入するよ。そこで実技を学ぶから、卒業くわつぎょうつてわけじゃないんだ」

「はあ……、なるほどなあ」

ネイビスもようやく合点がてんがいったようだ。

「しかしまあ、良かったな。友達作って楽しいめななんて損とんだからな。俺はてつきり、お前さんは根暗ねくらな性格のせいで友達が一人もいないのかと思ってたが——」

「——失礼ですよ、ネイビスさん……」

「冗談じょうたんだよ」

再び頭をガシガシと強引に掻かき回されたスィは、口を少しばかり尖とがらせながら本を閉じた。

「ん？ 帰るのか？」

「うん。今日は教会の手伝いもあるから」

「そうか」

先ほど初めて知ったスイの生活環境。

スイはまだ幼く、背も決して高くない。そんな少年が柵に本を戻そうと背伸びする後ろ姿を、ネイビスは余計な言葉を挟まず見つめていた。

「じゃあ、ネイビスさん。また」

「おう。もう少し年相応に振る舞えるようになれよ」

「はは、頑張りますね」

エレベーターの乗降口にあるパネルに手を乗せたスイに呼応して、【魔導式エレベーター】が階下から呼び出され、スイの目の前で停まった。

「楽しめよ、本の中ばかりがお前の世界じゃないんだからな」

ネイビスの眩きに、スイは「はい」と小さく返事をする、エレベーターに乗り込んだ。

透き通るような輝きを放つ銀色の髪。

もともと純血のヴェルディア人の髪は茶色であることが多かった。しかしかつて起こった『魔導戦争』の終焉を境に大量の移民が流れ込み、今ではヴェルディアにもさまざまな髪の色の方が暮ら

している。それでも、銀色の髪を持つ人間はスイを除けば一人として存在しない。

スイの髪だけが、その不思議な色を帯びているのである。

蒼い瞳もまた非常に珍しかった。

この特殊な容姿のスイが、これから一体どんな学園生活を送ることになるのか。ネイビスはとりとめもなく想像しながら、今日も一人、王立図書館で仕事に励むのだった。

——スイの物語が、これから始まろうとしていた。

## 1 編入生スイ

うららかな陽気。新たな生活の門出に相応しい、暖かな陽射しに包まれた王都ヴェル。

正方形の外壁で囲まれたこの街は、正面玄関である南門から真っ直ぐ北に大通りが延び、その先に王城がそびえる。

大通りの両側には大小さまざまな露店が軒を連ね、その一帯は『露店区』と呼ばれている。

『露店区』を北に進み、最初の十字路。



右手が『居住区・第三地区』——王立図書館を囲むように一般住宅がひしめき合う。

左手が『居住区・第四地区』——こちらも第三地区と同じように一般住宅が並ぶ区画だ。

再び露店区を北上し、二つめの十字路。

右手が『居住区・第二地区』——簡素な店や古びた家が建ち並び、奥には教会もある。

左手が『居住区・第一地区』——この第一地区にあるのが、ヴェルディアで最大の敷地面積を誇るヴェルディア魔法学園だ。『居住区』と名がつくのは大昔の名残であって、実際は学園の敷地と寮で埋まっている。

さらに北上すれば、大通りの中央に大きな円形の噴水と、それを囲む花壇がある。その右手には爵位を持つ貴族が居を構える『爵住区』が広がり、左手には高級な衣服や物品を取り揃えた『商店区』があった。

そしてようやく王城となる。

灰色の石造りの王城が悠然と佇む様は、まさに圧巻の景観と言えた。

居住区・第二地区——スイが暮らす教会は、露店区の広がるメインストリートを折れて真っ直ぐ進んだところに建っている。その庭先で、一人の若いシスターが鼻歌交じりに、パンツと小気味良い音を立てて洗濯物のシワを伸ばしていた。後ろで一本に結われた茶色い髪が軽やかに揺れる。紺色の修道服に身を包んだそのシスターは、少したれ目がちで優しそうな印象の女性だ。

「へリアさん、行ってきます」

そんな彼女——シスターのへリアは、背後の教会人口から聞こえてきた少年の声に、慌てて振り返った。

「あらスイ、もうそんな時間？ 気を付けてね。変な人に声をかけられても、ついて行っちゃダメだからね？ それとそれと……」

「あはは、初めて学園に行くってわけじゃないんだから……。行ってきます」

「えっ、あつ。変な女の子には気を付けるのよー！」

へリアの見送りの言葉が何故それであったのか、スイはもちろん知るはずもない。

これまでは午後の個人授業に合わせて通学していたスイも、今日からは一般生徒に交じって朝の通学路を歩くことになる。特別待遇だったスイは、学園の制服を着たこともなかった。

制服は白いブレザーに、赤いストライプの入った黒基調のズボン。ワイシャツは白で統一されていて、緑色の紐のような細いネクタイを着用する。

一年生から三年生は水色。四年生と五年生は緑色。六年生から八年生は赤で、九年生と十年生は青と、学年によってネクタイの色は異なる。

ちなみに女子生徒の制服は白いブレザーに、赤白黒のチェック柄のプリーツ型スカート、そして紺色のニーソックスを履く、という形だ。

もちろん制服も学園から支給されるため、生徒に費用の負担はない。

教会の神父であり、スイにとっては父親のような存在であるエイトスに、余計な出費をさせるのではないかと懸念していたスイも、これには安堵した。エイトスにとってみれば、その程度のことには気にするなど言いたいところだが、裕福でないのは事実である。

そんなことにも気を遣うスイの利口さに誇らしい気持ちになるが、一方で心配される自分の身を情けなくも感じていた。もちろんそんなエイトスの本心もスイは知らない。

——閑話休題。

教会から学園へは、大通りを挟んで真っ直ぐ一本道である。今まで、午後にはひっそり登校していたスイは、一般生徒達の衆目に晒されることなど皆無だった。

もちろん、これが普通の少年だったなら、皆もいちいち注目することはなかっただろう。

だが——

「ね、ねえねえ。あの子見て！」

「わ……。綺麗な髪の色……」

「あんな子ウチにいたっけ!？」

周囲の注目を一身に浴びることになるとは、スイも予想していなかった。

(……そんなに珍しい、のかな……?)

スイは目にかかるほど伸びた自分の前髪をひとつまみして、その髪を見つめた。銀色の細い線が、陽光に煌めいている。

(でも、確かにこの色で生まれてくる人はいないだよね……。やっぱり珍しい、よね)

自己完結すると、スイは再び真っ直ぐ学園に向かって歩き出した。

——スイは自分と他人の違いについてあまり考えたことがなかった。それは偏に、これまで同世代との集団生活に馴染みがなかったからだ。

教会にいるのは、自分よりも年下の子供達や、年の離れたシスター、そして神父であるエイトス。年も境遇も考え方も——それこそ髪の色もばらばらであり、比べる機会などなかったのである。

他の大陸からの移民により、今や多民族国家となったヴェルディアでは、現国王家が開明的な国政を敷いてきたおかげで、民族や階級による差別意識が比較的薄い。実際、優れた能力や財力があれば、純血のヴェルディア人でなくても爵位を授与され、上流貴族の仲間入りを果たすことも珍しくなかった。さらに、貴族と平民の間にも社会的な扱いの差はほとんどない。

ゆえに学園でも、そうした思想に基づく教育が行われているのだが、幼い子供達に倫理観を求められるにも限界があるというものだ。髪や瞳の色の珍しさはもとより、造り物のように端整な顔立ちの少年が歩いているとなれば、好奇の視線が集まるのも無理はなかった。

「おいつす、スイ」

「あ、リニツク先生。おはようございます」

「何してんだ、こんなところで？」

ヴェルディア魔法学園、『獣育学』講師、リニツク・ハイア。

茶色い髪は短くツンツンと撥ね、健康的で爽やかな印象が強い男性だ。簡素な黒いジャージ姿で袖を捲っている。

その活発で明るい雰囲気は生徒達にも好かれ、『獣育学の熱血漢』と呼ばれていた。

彼の質問の意味を理解したうえで、スイは答える。

「……わかってて言ってますか？」

「バレたか」

リニツクの冗談は、スイの冷静なツッコミを前に撃沈したのであった。

彼は過去に、スイを不法侵入者だと一方的に思い込んで職務室へと連れて行ったことがある。

他の講師からの説明で誤解が解けたにもかかわらず、その後何日にもわたって、学校でスイを見かけるたびに「不法侵入者だ！」と声をあげ、追いかけてからかったのである。なんとも少年らしいイタズラ心の持ち主なのだ。

「まあ何はともあれ、今日からはちゃんとした講師と生徒だ。特別扱いしないから覚悟しとけよ？」

「覚悟するのは構いませんけど、今日って職員会の日じゃありませんか？ 前に他の先生がそんな

こと言っちゃいましたけど……」

「……マ、マタ後デナ……」

嫌な汗を噴き出しつつ学園に向かって走り出すリニツクを見て、スイは呆れるように小さく笑った。

好奇の視線に晒されながら学園へと辿り着いたスイ。

ヴェルディア魔法学園は、王城に似た石造りの建物であり、手前に悠然と佇む第一棟から、第二棟、第三棟と続き、その奥には広大な校庭がある。それらの立派な建物などから、学園はヴェルディア国内でも有数の観光スポットとなっていた。

そもそも今から四十年近く前まで、このヴェルディア魔法学園は、王都防衛のための砦として用いられていた。外観が城のような造りなのは、当時の名残である。第一棟を軍務の中核とし、第二棟を各部署の執務室、第三棟のみが当時のヴェルディア魔法学園の生徒達が使う校舎だったそうだ。——つまるどころ、かつての学園は、新兵育成所だったのだ。

そんな軍用砦の名残がある景観も素晴らしいが、さらに【空間変異魔法】が施された校舎内も驚くべきものがある。

魔法によって空間が歪んだ校内はまるで別次元の世界のように、外からではまったく予想もつかない光景が広がっているのだ。

これまでは、職員達の研究室がある第一棟の中しか歩くことがなかったスイも、これから始まる学園生活では、授業によって校舎を移動したり校庭に出たりと動き回ることになる。

「どんな場所があるのかな……」

年齢のわりに大人びたところのあるスイだが、未知の学園内を歩きまわれるこれからの日々、少年らしく期待に胸を膨らませていた。

——スイは、一般クラスへの編入について、学園長であるカンデイス・シェイザと、ある約束を交わしていた。

カンデイスは白髪に茶色い瞳の老齢の男性だ。顔に刻まれた皺しわが険げんしさを醸し出しつつも、その瞳や表情からは優しそうな性格が窺うかがえる。いつもピシッと皺しわ一つないスーツを着こなし、愛用の黒塗りのステッキを肌身離さずずに持ち歩いていた。

入学以来彼とは一度も会うことがなかったスイだったが、この編入にあたり、事前に学園長室へと呼び出されたのだった。

ゆらゆらと揺らめく【魔導式ランプ】の灯りに照らされた学園長室内には、歴史を感じさせる暖炉ろや剥製はくせいが飾られている。部屋の中央にはテーブルを挟んでソファが向き合うように置かれ、その奥には大きな窓を背にして重厚感のある木製の机と椅子があった。

「良いかね、スイ君。キミが座学ざがくにおいてすでにすべてを修学していることは、他言無用だ。余計

な情報は、キミを目立たせ、結果的に孤立させてしまうかもしれない。健全な学園生活を送るためにそういったことは伏せておきなさい。」

カンデイスとしては、スイの異例の座学ざがく修学をわざわざ公表する必要はないと感じていた。

もしもスイが有力な貴族の子息しよくであったならば、公表することで箔はくをつけるという手もあったかもしれない。しかしスイは孤児こじであり、そうした画策かくさくの必要もなければ、それがかえって逆効果になる可能性もある。それがカンデイスの判断であった。

先述せんじゆつした通り、確かにこのヴェルディアでは階級による差別は無きに等しい。しかしそれはあくまでも、大人の社会における話だと思っておかなければならない。

よってカンデイスは、スイには自分のことを秘匿ひかくさせ、自分達もまた特別な扱いをせずにスイに学園生活を送らせてあげよう、と配慮はいりよするに至ったのだ。

もっとも、スイにはもともと自己を顕示けんじするつもりなどなかったため、喜んでその約束を交わすこととなった。

——カンデイスと交わしたそんな約束を思い返しながら、スイは生徒達のひしめき合う学園内へと足を踏み入れた。

新学年の始業式となるこの日は、全生徒が学年ごとに決められた場所に集まり、そこで魔力の測定を行うのが通例となっている。クラス対抗の競技などが多いヴェルディア魔法学園では、それぞ

れのクラスのパワーバランスを、これを基準に調整するのだ。

これこそ、スイが今まで関わることのなかった〈魔力ランク〉の測定である。この測定は、この先自分がどの道に進むべきかを判断する材料にもなる。

第二棟の二階にスイは案内され、その中へと足を踏み入れた。

こういった行事のときこそ、【空間変異魔法】が役立つ。通常の数倍の数の教室が設けられ、そこに次々と生徒が入っていく。魔力測定を行えるように内部が造り変えられているのだ。

この魔力の測定結果をもとに、生徒はクラスを割り当てられる。

すでに測定を終えた生徒達が一喜一憂している姿を見て、スイは自分の番をわくわくしながら待っていた。

「ね、ねえねえ」

「ん？」

不意に後ろに並んでいた女子生徒に声をかけられ、スイが振り返る。

ショートカットの茶色い髪があつちこつちに撥ねたそばかす交じりの少女が、どこか緊張した様子でスイを見つめていた。

「私、リンプ。アナタ見たことないけど、編入生？」

「うん、スイって言っただ。よろしくね」

「う、うんっ」

リンプのその一言がきっかけとなって、生徒達が一斉にスイに群がり、口々にいろいろな質問を投げかけ始めた。

編入生という特殊な存在。さらに珍しい外見。その少年が物腰も柔らかく、落ち着いた雰囲気です姿を見て、一目で好感を持ち、詰め寄り出したのだ。

しかし、そんな生徒達を、『幻想学』の講師メトレイア・シウーが睨み付けた。

漆黒の艶やかな長髪。黒い瞳。そして黒い質素なドレスを着た美しい女性。年の頃は二十代前半といったところか。物静かな性格と、どちらかと言えば冷たい印象を与える表情。

スイにとっては優しい講師なのだが、他の生徒達にとってはそうでもないようで、メトレイアの視線に皆がたちまち静まりかえる。矢継ぎ早な質問が消えたことにスイは少しだけ安堵した。

「スイ君。こちらへどうぞ」

「あ、はい」

周囲の生徒を目で殺したメトレイアに声をかけられ、スイは彼女が手で示した教室へと足を踏み入れた。

その教室は、六畳程度の長方形の造りをしていた。机と椅子があり、そこに講師が腰かけている。そして講師の対面に置かれた小さな椅子。まるで診察室のようである。

「おやあ、誰かと思ったら天才クンじゃないですか」

「あ、ディア先生。おはようございます」

「おはよう。そういえば四年生から一般クラスに編入するんだったね」

『薬草学』の講師、ディア・ドーガス。保健医の代わりも務める穏やかな男性だ。

身体の線が不健康なまでに細く、髪はボサボサで切られていない。伸びた前髪の間から、小さな顔に似合わない大きな丸眼鏡が覗いている。

その眼鏡越しに、ギョロつとした目がスイをとらえた。

「では早速、君の魔力を測らせてもらおうよ」

「お願いします！」

思わず気合が入るスイ。ディアは微笑み、スイの腕に手を翳す。すると、小さな魔法陣がスイの腕に浮かび上がった。

そこに何やら文字が刻まれていく様子を見つめながら、ディアがその目をさらに大きく見開いた。

「おおお……、これはこれは……」

「どう、ですか？」

「いや、素晴らしいの一言に尽きる……。やはり君は神から愛されているね」

「神から愛されて……？」

小首を傾げたスイに対し、ディアはにっこりと表情を綻ばせると、わざとらしく咳払いをして続けた。

「魔力は、Aランクだよ」

ディアが告げると同時に魔法陣からふつと文字が浮かび上がる。そして机の上にあるスイのカルテに向かって飛んで行くと、そのままカルテに吸い込まれるように文字が刻まれていった。

「Aランク……？」

「こればかりは才能としか言えないね。普通であれば、君の年なら高くてもDランクといったところだろう。Aランクの者なんてまずいないね」

基本的に、魔力のランクはA〜Fに分けられる。

子供の頃はFランクからDランクが平均的なライン。そこから本人の素質や日々の努力によって少しずつ成長していくことになる。

ちなみに、Cランクまで行けばかなり優秀といえ、国王軍の魔法師団としての合格基準をクリアしているレベル。Bランクなら師団長クラス。Aランクともなれば、それこそこの世界には数えるほどしかいないと言われている。

それだけ、魔力Aランクというのは驚愕に値するレベルなのだ。

「特性は……」

さらに説明しようとして、ディアの言葉が詰まった。

「ディア先生？」

「……ふむ。特性はこれといってない……ようだ。こんなことがあるのだろうか……」

「……？」

「ああ、いや。君はまだ私生活で魔法を使っていないようだからね。いろいろな魔法に触れば、特性も付加されるだろう」

「そう、ですか」

魔力測定では、通常その人と相性がよい魔法の属性や種類も示される。

例えるなら、炎との相性がよければ腕に描かれた魔法陣が炎のように浮かび上がり、水ならば水面の波紋のように揺れ、風ならば流れるように陣が消える、といったところだ。

何も特徴を示さないということは普通はあり得ない。

スイもそれについての知識を持つてはいたが、本に書かれたことだけがすべてではないと割り切り、あまり訊かずにそのまま流した。

「では、クラス分けは……、そうだな。Dクラスになるね」

「はい」

「これからもよろしく、スイ君」

ディアの言葉に見送られ、スイはその場を後にした。

検査を行った第二棟の、四階にあるDクラス。

教室は黒板のある教壇から後方に行くに連れて一段ずつ高くなり、扇状に席が広がっている。

相変わらず、噂の編入生という扱いのスイには周囲から好奇な視線が浴びせられたが、本人はど

うということもなく気楽に座っていた。

そんな中、教室に『歴史学』のメルニア・オリンという名の講師が入ってきた。

スイともよく話をする若い女性講師だ。

小柄で、二十代前半という年齢にしては幼い顔立ちの彼女は、いつも頭の後ろの高い位置で髪を一本に縛っていた。明るい性格で、リニックと同じように、よくジャージを着ている。

「ああ、いたいた。スイ君。ちょっと前に来てー」

「はい」

招かれたスイが教壇の前に行くと、メルニアがニッコリと笑ってから他の生徒を見つめた。

「はい注目ー！」

メルニアの声に生徒達がざわつく。

「彼はスイ君。わけあって四年生になるまで別のところで授業を受けていたけど、これからは皆と一緒に勉強することになりました。スイ君、挨拶してー」

突然挨拶を促すメルニアの無茶振りに困惑しながらも、スイは小さく頭を下げた。

「えっと、スイです。こうして皆さんと一緒に勉強するのは初めてですが、よろしくお願いします」

「ちなみに、この子の魔力Aランクだからねー。へ々に喧嘩売ったら返り討ちにあっちゃうぞー」  
メルニアの言葉の後で、しばしの沈黙が流れ――

「……ええええええ!?」



——クラス中から叫び声が上がった。

教室中に叫び声が響き渡る中、メルリアがスイを見つめてウィンクをした。

メルリアとしては慣れない集団生活の中でイジメられないように配慮——もとい、脅したつもりだったのだが、スイにとつてはこれはいらないお節介りだ。

カンデイスとの約束を考えれば、言うべきではない情報だ。

そのとき、爆弾発言の主であるメルリアに、悪寒が走ったことは誰も知らない。実はメルリアの耳にメトレリアからの【伝言魔法】が届いていたのだ。

《そういうことは釘を刺されずとも公表するべきじゃないってことぐらい、わかるわよね……？》  
殺意全開でそう言われたメルリアは、背筋に嫌な汗を流しながら、慌てて言い直す。

「な、なーんて冗談は置いて……、ホ、ほほ、ほんとはDランクだからっ！」

「なーんだ」という生徒達の声が飛び交う中、スイは自分の肩に乗っているメルリアの手が小刻みに揺れていることに気付き、事の顛末をなんとなく想像して乾いた笑みを浮かべた。何せメルリアの笑顔は凍り付き、青ざめていたのだから。



教会に住まうシスターのヘリアは、朝からずっとそわそわと落ち着かなかった。

礼拝堂で一人座り込み、俯きながらため息を漏らすと、顔をあげた。

「ああ……！ 今頃私の天使、スイはきつと慣れない集団生活で心を痛めているわ……！」

「バカなの？」

「失礼ですね！」

礼拝堂で嘆くヘリアに辛辣な言葉を投げたのは、同じシスターであるシエスカだ。

肩まで伸ばした赤い髪に黄色い瞳。大雑把で少々ガサツな節があり、男勝りな性格の女性だ。シスターのイメージとはかけ離れた雰囲気がある。

「まあスイが人形みたいで可愛い天使ということは認めるわ。認めざるを得ない。反論したら殺すわ。でも、アンタのじゃないでしょ？」

「う……」

「あの子は私達みんなのものよ！」

論点がおかしいことに気付かない二人の会話は至って平和である。

「だ、だって今日ちゃんと朝の挨拶したし！」

「私のほうが先におはようって言ってもらったもんね！」

「な……、なんですって……!?!」

「寝ぼけ顔のスイよ？ どう!?」

「さ、最近シエスカさんが早起きなのは、まさか寝起きのスイを愛でるためだったなんて……ッ！」

この世界の絶望を一身に背負ったかのようにヘリアは崩れ落ちた。

「でも、ま・ず・い・わ・よ……」

「な、何がですか……?」

固唾を呑んでシエスカの言葉を待つヘリア。

「今までは孤高の存在として、近所の若い女の子達からも遠巻きに見つめられていただけの私達の天使が、これからは同じ学校の女子生徒達の毒牙にかかるかもしれないのよ……っ！」

「——ッ！ し、しかしシスター・シエスカ……！ スイはまだ恋愛とかそういうものには鈍感なハズでは……！」

「私達の誘惑に打ち克てるぐらいの美人耐性は養っているけどね……。それでも、同年代は？ 話したこともない相手は？」

会話の内容はともかく、シエスカとヘリアの雰囲気には鬼気迫るものがある。

「こっ、これまでの免疫を上回る可能性があると言うのですか!？」

「ええ。それに、魔法学園は女生徒の比率が七割と高いわ……。これはすでにレッドゾーン……！」

「ああ、主よ……！ どうかその偉大なるご加護でスイを……」

二人の話す内容は、すでにシスターという立場を逸脱していた。そんな二人の会話を偶然聞いたエイトスは、深く重いため息を漏らした。

彼も知らない。

何故こんなにも、シスター達がスイに執着するのか。

(……まったく、何であんな女なんかのクラスにスイ君が……)

メトレイアは不機嫌だった。

成績優秀であり、神秘的な容姿を持ちあわせ、魔力もAランク。そんなスイに執心している女性はこちらにもいた。

(しかも余計なことまで言って……【盗聴魔法】を使っておいて正解でしたわ……。そうでなければ、スイ君がいらぬ嫉妬を受けて傷ついでしまうところでしたもの……)

そんなことを考えている矢先、廊下でスイがメルアと話し込んでる姿を見つけ、足を止めたメトレイア。楽しそうに話し込むメルアに、メトレイアは殺意を抱きかけた。が、スイがメトレイアに気付いたので、その殺意を一瞬にして柔らかな笑顔でかき消す。

「メトレイア先生、おはようございます」

「おはよう、スイ君」

「幻想学の授業、今日から僕もスタートします。またお世話になります」

「え、ええ。またよろしくね」

それじゃあ、と告げてメトレイアは二人の前を堂々と通り過ぎ、角を曲がると足を止めた。顔を真っ赤にしながら憂いを帯びた瞳で廊下の壁にもたれる。

(ああ……、ダメよ、メトレイア……。あと七年の辛抱よ……)

あと七年でスイは晴れて学園を卒業し、大人になる。当然同じようにメトレイアも歳を取るのだが、それについて本人は一切考えていない。卒業していれば問題ない。そんな考えである。

(気を引き締めなくちゃ……。あの子の勉強に対する姿勢は本物……。研究者レベルの質問も予習しておかなくちゃダメね……)

真面目で奥手な性格とその華麗な容姿から、近寄り難い雰囲気のある孤高の美人。それが災いし、言い寄られることも少ない。ゆえに、恋に落ちたこともないメトレイアは、少々危険な発想を持っていた。

彼女も知らない。

自分がどうしてスイに執心しているのか。

そもそも、そのきっかけが何だったのかさえ曖昧なのだ。



「スイが編入してきてから一週間が過ぎようとしていた。四年Dクラスの前の廊下は明らかに他と比べて人通りが多い。その半数以上は、スイを一目見ようという女子生徒達である。教室の前を何となく歩いて通り過ぎてみたり、同じDクラスの生徒のところへ用もないのに遊びに来たりしているのだ。」

整った顔立ちに、綺麗な銀髪。吸い込まれそうな蒼い瞳。その極めて珍しい容姿に対する周囲の注目ぶりは凄まじかった。

この世界では、男女の比率に偏りがあり、女性が七、男性が三という割合である。ちなみに男女差別はほとんどなく、性別にかかわらず能力さえあれば国家を統べることもできる。

そしてその男女比は、このヴェルディア魔法学園も例外ではない。

周囲の注目を一身に受けるスイという存在。男子生徒は、女子生徒達の注目を浴びるスイを妬み、排除しようという発想を抱きそうなものだが、それでも彼らがそんなことをしないのは、偏に恐怖からである。

女性が牛耳るヴェルディア魔法学園でヘタなことをして、あまつさえ周囲に知られようものなら、今後の未来に大きく差さわるのだ。

ならば、とスイへ取り入ることを決意する。

その結果、スイの学園生活は随分と賑やかなものになっていった。

「ちよつと、スイ君。付き合ってもらえるかしら？」

どこか高飛車なしゃべり方で、とある少女がスイに向かつて声をかけた。

茶髪茶眼。胸元まで伸びた髪の手端をクルクルと巻いている、少しばかり目のつり上がった女子生徒、ミリア・オーガット。

彼女の一声に、スイを囲んでいた生徒達が一斉に道を空けた。

「確か、ミリアさんだったね。どうしたの？」

「わたくしが声をかけたのですから、付き合うのが当然でしょう？」

「何で？」

スイの言葉に周囲が騒然とする。ミリアもまた少しばかり苛立ったように眉を動かし、自分の胸に手を当てて言葉を続けた。

「わたくしの家名はオーガットよ？」

「オーガット……って、伯爵家の？」

「そうよ。何においても貴族は庶民より優先されるべきでしょう？」

自慢気に鼻を鳴らしたミリアを、スイはとくに畏まる様子もなく見つめた。

そんなスイの対応に、事態の深刻さに気付いていないのではと察した男子生徒達が慌てて耳打ちする。

「スイ君、ちゃんと言うこと聞いた方が良いよ……」

「ミルアさん怒らせたら大変だよ……?」

周囲からの助言を受けたスイだが、キョトンとしながら彼らの忠告に疑問を抱いていた。先述した通り、このヴェルディアにおいては貴族が平民に謂れの無い圧力をかけることはほとんどない。もしあったとしても、教会に暮らしているスイに影響はない。その理由は教会の特殊性にある。

基本的に貴族の権力が及ぶ範囲は政治や経済といった、仕事や生活に関する方面が多い。しかし、宗教を司る教会はその範囲の外にある。もつと言えば、教会に権力を用いるということは、この世界の神を崇める人々や文化すべてを敵に回すことを意味するのだ。

ヴェルディアの国家思想に加え、教会の特殊性を考えれば、ミルアは自分の家——つまりは伯爵家の力というものについて、少々過剰な解釈をしていると言えた。

一方で周囲の生徒達もまた、ミルアの態度があまりに大きいことから、実質以上の権力者のように錯覚し、萎縮する。それがミルアを増長させる結果となってしまうっているのだろう。

そんなことを考えつつ、スイは改めてミルアを見つめた。

「で、ミルアさん。付き合って欲しいって?」

「そうですね……。でしたら、まずはわたくしの靴を拭きなさい」

「無理だね」

「なっ……!?」

あつさりと断るスイに、周囲もミルアも驚いて声を失った。

「そ、それが伯爵家の令嬢に対して——!」

「——ミルアさんの靴は動物革だから、ちゃんとした研磨材がなければ傷むだけなんだ。それに、魔法でしっかりコーティングされてるおかげで、汚れもついてない。さすが、身なりに気を遣ってるね」

スイがミルアの靴を指差して説明する。もちろんこれは、ミルアの矜持や体裁を守りつつ、その理不尽な命令を断るためのスイの方便なのだ、そのことに周囲の生徒はおろか、ミルアも気付いていない。周囲が感心する中、ミルアは軽く咳払いして口を開いた。

「そっ、そうよ! ちゃんとわかっているじゃないの!」

「うん、褒めてもらえるなら良かったよ」

「ふ、フン。ちゃんとした知識を持っているなら良いわ、今回は認めてあげるわ」

上機嫌で踵を返してツカツカと歩いていくミルアを見て、スイは誰にも悟られることがないように、小さくため息を漏らした。

(変わった子もいるんだなあ……)

口をついて出たそれらしい方便でしかなかったが、周囲からは「頭が良いんだねー」などと尊敬を集めてしまい、バツが悪そうに頬を掻くスイであった。



——「学園生活は概ね順風満帆だ」

王立図書館の十四階層。そこで本を読みながらスイはネイビスにそう告げた。しかし、ネイビスから見れば、スイが言うような順風満帆さは感じられない、というのが本音である。

もともとこの王立図書館は閑散としていて静かな空間のだが、スイが学園に通い出してから、一般階層を訪れるヴェルディア魔法学園の女子生徒が急増した。

彼女達がスイを目当てに来たことを理解したネイビスは、時折スイの居場所を尋ねてくる女子生徒に知らないで偽り、伝えないように心掛けている。

スイの邪魔になるだろうと判断したからだ。

「しかしまあ、ちよつとは自覚持たないと、お前さんも」

「うん、わかっている。ちゃんと四年生の勉強も復習を兼ねてやってるよ」

「いや、そうじゃないんだけど……」

学生としての自覚、ではなく、周囲を騒がせていることに対しての自覚を促したつもりだったが、どうやらスイには前者として捉えられたようである。

ネイビスのスイに対する印象は、頭の良い世間知らずだ。

人付き合いの基本的な礼儀作法はしっかり身につけていて、どこぞの貴族の家で厳しくしつけれ

れたようにも見える。

しかし、友情だの恋だの愛だの、つまりは対人関係の感情がともなう分野にはどうにも疎く、そのうえ自分の目立つ容姿を単純に考えすぎている傾向がある。

こればかりは自分で学んでいくしかない——ネイビスは密かに、これから先、どこか浮世離れしたスイに人間味のある成長を望んでいた。

「それにしても、今日はずいぶん多いな……」

スイの座る閲覧用のテーブルに積まれた本の山。その膨大な量を見つめてネイビスは呟いた。

「うん、明日から『対魔術学』が始まるから。しっかりと予習しておかなくちゃって思っ

そんなスイの言葉にネイビスは感心しながら、スイが読んでいる書物を覗いた。

「……お前が今読んでる本は師団長クラスが手を焼いてる魔法だぞ……。使ったら相手は死ぬぞ……」

「あはは、使えるわけじゃないよ。ただ、どんな魔法があるのか調べてるだけ」

ネイビスはスイの〈魔力ランク〉がAであったことをスイ本人の口から聞かされている。つまり、スイにその魔法を使えるだけの素養があることは十分にわかっていた。

「……ま、使うなよ？」

「さすがに人に対していきなり使うつもりはないよ。心配しすぎだよ」

世間知らずな少年を氣遣うネイビスの表情は、まるで子供を心配する親のそれであった。

王立図書館での勉強を終えたスイが教会へと戻る頃、すでに空は茜色に染まり、ヴェルの街並みもすっかりオレンジに彩られていた。図書館のある第三地区から教会へは、ゆっくり歩いても十分もかからない程度だ。北上し、露店区から教会へと続く大通りに出たスイは、背後から名前を呼ばれて振り返った。

「あ、イルシアさん」

大きく膨れ上がった買い物バッグを手に持った女性、シスターのイルシアだ。

イルシアは教会の中でもっとも年上のシスターである。

緑色の長い髪を質素なりボンで纏めていた。瞳の色は黄色でいつも眼鏡をかけている。平均に比べれば長身で、清楚な雰囲気があり、シスターの中でもひと際落ち着きのある女性だ。

「今帰りなの？」

「うん。荷物持つよ」

「あら、ありがとう。でも大丈夫よ」

スイの隣りに並んだイルシアが微笑みながらそう答えた。

「学園生活はどう？」

「うーん、明日からが本番って感じかな？ 『対魔術学』も始まるし、明後日は『獣育学』もあるからね」

「始まって一週間は基礎授業のみだものね」

「うん。でもいろいろな子と話してるから、楽しいよ」

「フフ、貴方は人気者になりそうね」

「そうかなあ？」

「ええ。聡明でその性格ですもの。……昔から引き取り希望が多くて大変だったんだから……」

突如声のボリュームを絞ったイルシアの独り言に、スイが小首を傾げる。

「ん？」

「ホホホ、何でもないわ」

スイには聞こえなかったが、スイが引き取られない理由は実はそのここにあった。

その美しい銀髪と蒼い瞳、そして整った顔立ちに心を奪われる者は多く、迫害どころか実際は引き取り手として名乗り出る者が山ほどいた。

スイが六歳になろうという頃にはそれがきっかけで騒動が起きたぐらいだ。

しかもスイの引き取りに名乗りを挙げるのは女性ばかり。妻がスイに魅了されている様子を見て、夫たちは何とか別の子を引き取ろうと必死だった。

引き取るために離婚する時まで言い出す婦人もいたため、神父であるエイトスとイルシアが協力してスイを教会で育てあげようと決心したのだ。

「スイ、教会で暮らしていることに、何か言われたりしていない？」

「ううん、何も。僕は教会が好きだし、何か言われたとしても気にならないよ」

「そう、それは良かった」  
並んで帰る二人の姿は微笑ましく、少し歳の離れた姉弟といった様子だった。

——が、スイは知らない。

「わかってますわね？ シェスカ、ヘリア」

すつかり子供達が寝静まった後、礼拝堂にイルシアの声が響き渡る。

「イ、イルシアさん……。顔が……。怖いです……」

「う、うんうんうん。だ、ただ大丈夫だよ、スイはすっかりしてるから……」

「そういう油断は禁物です。もしも女子生徒が教会にスイを訪ねて来るようなことがあったら、必ず名前と顔、それに住所を調べるのですよ？」

「はっ、はいっ！」

「私達の天使に手出しをするならば、神の裁きが下るということをしっかりと……。ウフフフ……」  
熱狂的なスイの執心者は、何もヘリアとシェスカだけではない。

イルシアの母性愛は、かなり歪んだ形でスイへ向けられていた。

ここにもまた、何故かスイに熱を上げる女性の姿があったのである。

### 3 対魔術学

四年生になってから学べる授業『対魔術学』。

世界中を巻き込んだ『魔導戦争』がきっかけとなって生み出されたこの授業は、幼い頃から戦闘技術を競い合わせることで、その国の才能ある若者を発掘しようという目的がある。つまりは実技に重きを置いた授業だ。実技で良い評価を得られれば学科が多少悪くてもかなり挽回できる。

今では戦争からも手を引いたヴェルディアであるが、それでも安定した出世コースと言われているのが、軍部への招集だ。その足掛かりの一つとなっている『対魔術学』は、生徒の将来に関わる重要な授業と捉えられていた。

『対魔術学』の最初の授業は、四年生全員が一堂に会して行われる。

大きな講堂に集められた四年生は、午前中に『対魔術学』の基礎である魔力についての概要や、実際に魔力を扱う際の注意点などを学び、自身の意思で魔力を扱う練習をする。

そして午後からは、魔力測定の結果——つまりはへ魔力ランク〳〵が上位二十位以内の生徒による、一対一の模擬戦が行われる予定だ。

この初めての模擬戦は、学園の全講師が見守る中で行われるため、午後の授業は休講となる。だ